The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文治五年の慈円の和歌活動
Author(s)	山本, 一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1980, 14, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47789
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文治五年の慈円の和歌活動

山本　一

文治五年（一一八九）は、歌壇史的にはいわゆる建久期良経歌壇の活動が始まる直前の時期、政治的には、前年二月の内大臣良通の急死の打撃から立ちなおった九条兼実が、任子の入内実現に九条家の将来の希望を託している時期にあたる。この年の慈円の動向は、兼実の日記『玉葉』と、『拾玉集』所収の贈答歌群とによって窺うことができる。ここで言う『拾玉集』の贈答歌群とは、五冊本の第四冊から第五冊にかけて収められている、文治五年七月から建久七年に到る一連の贈答歌資料を指すのであって、詞書や随所に見られる左注から慈円自身によって整理されたものと考えられ、全体は詠作年時の順に配列されている。ただ建久二年から三年の部分に混乱が有るが、資料がいったん整理されて以後の乱れと考えて復元することができる。文治五年については、年の後半のみがこの資料の範囲に含まれるが、この時期に関してはこれらの贈答歌が慈円の動きを知る手がかりとなる。

『玉葉』によれば、この年の春の慈円は、正月十二日に任子のための仏眼護摩、三月三日に兼実の大炊殿での不動護摩を修し、一方、二月三十日には故良通の室の出家に戒師を勤めるなど、九条家関係の活動を行なっており、任子入内を受諾する院宣が兼実の許にもたらされて五日後の四月八日にも、兼実と面談している。以上の期間はお

そらく白川房に居て兼実と連絡を取り合っていたと考えられるが、七月以降には一時無動寺に居たことが『拾玉集』の贈答歌から知られる。すなわち、西行が無動寺に慈円を訪うた際に大乗院で交わされた一対（五四二二・二三。歌番号は多賀宗隼氏編『校本拾玉集』に依る。以下同様。）であって、『拾玉集』の配列から七月以降八月半ばまでのものと推定されるのである。[1] 八月には、後鳥羽天皇のために四季秋分護摩を修し、また兼実の許で不動護摩を修していることが『玉葉』から知られる。九月には再び無動寺に登り、登山に際して寂蓮と十首ずつの贈答（五四三一以下）を交わし、また九月末にも大乗院で六首（五一〇二以下）を独詠している。しかし十一月二十五日、十二月十三日に兼実を訪うている記事が『玉葉』に在り、冬には下山していたらしく、十一月五日と十七日の雪に際しての兼実・公衡・定家等との贈答歌（五四五二から六〇）も山上と京との往還ではないと思われる。

七月頃の西行とのやりとりは大乗院で交わされ、九月末にも大乗院で歌作しているが、九月の登山の折の寂蓮との十首贈答の左注に「旧跡御修造を思ふなるべし」と有るのも、大乗院の再興について述べたものと見られる。[2] 再興大乗院の供養が行なわれたのは建久五年（一一九四）八月十六日であり、その際の慈円の敬白文[3]に「承旨励力九年」と有るところから、兼実の意を受けて慈円がこの事業のための尽力を始めたのは文治二年頃からと知られるが、[4] 文治五年当時の事業の具体的状況は判らない。

任子の入内と大乗院の再興とのふたつを、兼実と共通の重要な関心事としつつ、無動寺と京都とを何度か往復しているのが文治五年の慈円であるが、以下ではこの年の彼の作歌活動を、百首歌・歌会・贈答歌に分けて考察したい。

一、百首歌企画

『拾玉集』に集成された百首歌を見ると、慈円は前年文治四年には、秋に「御裳濯百首」、十二月には「早率露胆百首」と、二度の百首歌を詠んでいる。前者は西行勧進の太神宮奉納百首であって、定家・家隆など他の歌人はすでに文治二年頃に勧進を受けて詠作していたが、この年になって、追加参加のような形で慈円が詠作に踏み切ったのである。(5) 慈円は文治三年にも「厭離百首」や「結題百首」を詠んでいるが、「厭離百首」は隠遁の志を同じくしていた晴真という僧からの百首に応えたもの、「結題百首」は以前の兼実家の百首で用いられた題によって、兼実が慈円と寂蓮に詠ませたもので、(6) 百首歌に関係しているのは慈円と親密な僅かな人びとに限られていた。これに対して「御裳濯百首」は、他の多くの歌人たちと共通の機会での詠作として慈円にとって最初のものと見られ、これを契機に、慈円の作歌活動は同時代の歌人たちの動きに明確に連関するものになってくる。「早率露胆百首」は、跋文が示すように稚児の作という仮構に立っているが、その跋文には「今の世の歌よみたちの百首」に刺激されたという詠作動機の説明が有り、「殷富門院大輔百首」「閑居百首」など文治三年頃の百首歌の盛行への、慈円の関心の投影を見ることができる。しかも慈円は、百首歌流行の担い手の一人であった定家にこの百首を示し、応和を求めたのであって、定家は『拾遺愚草』に見える二つの百首歌でこれに応えた。これは百首歌流行の動きに慈円自身が主体的に参加したことを意味する。

文治四年後半のふたつの百首歌は、「西行勧進二見浦百首」「殷富門院大輔百首」「閑居百首」など文治二年から三年にかけての他の歌人たちの活発な動きの後を追うような形で、慈円が積極的な和歌活動を始めたことを示して

いる。そして文治五年には、次に見るように日吉社奉納の百首歌を企画し、歌人たちに参加を働きかける。それは前年後半の積極的な活動の延長線上に在る動きとして理解されるのである。

文治五年の慈円の百首勧進を示す資料は、『拾玉集』の贈答歌群の中（五四二〇・二一）および『為秀本長秋詠草』など俊成の家集に見える、慈円と俊成との贈答歌一対であるが、詞書のより詳細な後者によって示す。

法性寺座主法印百首歌をよみて人々にもすゝめらるときこえしを、入道両社の百首といふものよまむとすなり。おなじくはこれにぐして、わがよめるをもぐして日よしにもまいらせよと侍しを、よみやうなどはおもふたまへしかど、人々にぐし申べしともおもふたまへず、又いでこんこともありがたしなど申たりしを、なをなどすすめつかはして消息のおくに　　法印

いかでかはきみがにほひをそへざらん神にたむくるもゝくさのはな

返し

たむくべきこゝろばかりはありながらはなにならへんことのはぞなき

（古典文庫150所収『為秀本長秋詠草』四一二・四一三）

この贈答歌については松野陽一氏が詳しく考察され、[7] 俊成の「両社の百首」が『五社百首』の前身である日吉・春日両社への奉納百首で、本来この両社への奉納歌合として計画されたものだったこと、慈円がこのうち片方の日吉社への分を、自らの日吉社奉納百首企画に吸収しようとして俊成を誘ったのであるが、それでは俊成の企画の主体性が失われることになるので俊成が拒絶したのであること、等を明らかにされた。またこのやりとりの年時について、『拾玉集』の方の配列から文治五年七月から八月十五日の間とされ、また慈円の奉納百首企画は大乗院再興の

祈願と関係するかと推測されている。

この百首勧進に関わるかと思われるもう一種の資料は、『藤原隆信朝臣集』に見られる。この集には「よしみつの大僧正家、人々に百首うたよませられしに」「吉水の前大僧正家百首に」等の詞書を持つ歌が、『私家集大成・中世Ⅰ』の歌番号で示すと、三六・九八・一〇一・一四五・一八八・四七七・四八九・四九〇・五一四・五四六の計十首見い出される。そのうち題を明記したものを列挙すると、「のこりのゆき」「あやめ」「あはぬこひ」「逢恋」「のちのあした」「しのぶこひ」「恨恋」であり、全て堀川百首題に一致する。詞書に題を記さない三首、

いかなれはふたはなからにとしをへてけふのみあれにあふひ成らん（九八）

秋の色もとしにそへてやまさるらんけさ吹風にゝるものそなき（一四五）

霧のまにこまにまかするいそつたひいつく成らん松かせのこゑ（一八八）

もそれぞれ、「葵」「立秋」「霧」の各題に内容が一致し、この百首が堀川題百首であったことはほぼ間違いない。

『藤原隆信朝臣集』の配列や官位表記は詠作年時に関係が無く、この集の側からは年時を決められないが、慈円が他の複数の歌人に百首歌を勧めたという確実な資料は隆信の在世中に他に無いので、俊成への勧進と同じ折の作と見てよいと思われる。隆信は、兼実歌壇が清輔の指導下に在った頃からの構成員で、治承二年（一一七八）六月、兼実がはじめて俊成を招いた際に仲介の役に当っているなど、九条家との関係の深い歌人だったから、俊成と共に慈円の勧進の対象になったとして不自然はない。また俊成の「両社の百首」は、現存の『五社百首』から判るように堀川題百首であるから、慈円の勧進百首が同じ題に依っていたとするなら、俊成の作を合併しようという一見無理な提案を慈円が再三行なったこともすこしは理解しやすくなるのである。

俊成・隆信の他に慈円の勧進を受けた可能性の高い歌人として、同じく御子左家の歌人で慈円との交渉の深い寂蓮と定家がまずあげられ、季経など九条家と結びつきの深い六条家歌人、静賢など慈円と親交の有る僧侶歌人などが考えられるが、そのいずれについても慈円勧進の百首を詠作した明徴が無い。定家は、先述のように慈円の「早率露胆百首」に応える「奉和無動寺法印早率露胆百首」「重奉和早率百首」をこの年の春に詠んでいる。「早率露胆百首」が堀川題であるため、この二つの百首も堀川題で詠まれている。すでに二度の百首を詠んだ定家が、同年のうちにさらに日吉社奉納のための同題の百首を勧められても、ただちに応じ得たかどうかは問題であろう。寂蓮の百首歌として伝存するもののうち、半田公平氏『寂蓮法師全歌集とその研究』に翻刻されている「少輔入道か百首」は、堀川題に依っているようであり（題は記されていないが、前掲書歌番号による七二から七四を、四八の次へ、八五から八七を、九七の次へそれぞれ移動させるなどして歌順を訂せば、堀川題と一致していることが判る。）、注意されるが、詠作事情は明確でない。他に、寂蓮が慈円勧進の百首を詠んだことを示す資料は見当らない。

次に慈円自身の作であるが、『拾玉集』には、『千載集』に一首を採られていることからそれ以前の作と知られる一種の他に、文治四年十二月十三日の日付を持つ先述の「早率露胆百首」、建久元年五月二十八日の日付を持つ「宇治山百首」の計三種の堀川題百首が収められている。このうち文治五年に最も詠作年時が接近しているのは「早率露胆百首」であるが、遊戯的性格の跋文を持ち、定家が二度にわたって応和していることから、奉納百首とは別個のものと考えられる。なお、堀川題と否とに拘らず、文治五年の間に詠まれたと見られる百首歌は『拾玉集』に無いが、この年の前後、文治三年から建久四年まで慈円は毎年百首歌を詠んでおり、この年にも日吉社奉納百首が詠作されていたと想定して不自然はない。

松野陽一氏は、この百首奉納企画は途中で放棄されたものと考えられ、その原因として、俊成の参加拒否の他に、西行の自歌合企画からの影響を指摘された。[8] たしかに、上に見てきたように関係資料が限られていることは、この企画が完遂されなかったことの結果とも解される。また、建暦年間に慈円が日吉社に奉納した百首歌（『拾玉集』第二冊）の跋文に「さてしもかやうなれば、いまだひえに百首などよみて奉る事のなかりければにや」という一節が有り、文字通りに解すれば、文治五年の折には百首奉納は果たされなかったことになるだろう。なお『藤原隆信朝臣集』には、撰歌合の撰外歌（一八、二一四、二一五など）も見えており、完成以後の歌合や百首歌に基づいた集ではないので、同集に作の収められていることと慈円勧進百首の最終的成否とは別問題である。

このように慈円の日吉社奉納百首企画の実態には不明な点が極めて多い。しかし九条家の和歌活動が文治五年冬の「雪十首会」の前後から再び活発化して、建久期良経歌壇の形成へと向っていくことを考えると、この動きをわずかに先駆ける形で、有力歌人の作を集中する試みを慈円が行なっていることは注意を引く。建久期歌壇の形成と活動にとっての慈円の役割の重要性は藤平春男氏が指摘されており、[9] とくに「雪十首会」や同じ頃詠進された「任子入内屏風歌」と慈円の関係については片山享氏の指摘が有る。[10] 日吉社奉納百首の企画はあるいは完遂されなかったとしても、そこに示された慈円の意欲は、その後の良経の協力者としての活動の中に引き継がれていったと見られるのである。

二、歌会

この年に慈円が出詠したことの明らかな歌会には、十二月の、良経主催「雪十首会」が有り、『拾玉集』に「大

納言殿密々会之時、尋玄にかはりて雪の十首」の詞書で十首の作が収められている（四二八〇以下）。

慈円は、寿永三年二月二十二日の報恩講で「他人を以て名と為し」て歌作していることが『玉葉』から知られる他、建久年間の「花月百首」「当座百首」「六百番歌合百首」を時貞・安成・信定などの名で詠み、建久六年女房歌合後の歌会（四三三七から四一）では「安成にかはりて」、同七年「緇素歌合」（四二五〇から五六）では「人にかはりて」詠んでいることが『拾玉集』から知られる。九条家の歌会ではふつう隠名で詠作していたと見られる。

「雪十首会」には良経・慈円のほか寂蓮・定家が参加しており、その意義については先学の論が有る。[11] 慈円の作の中では、「雪中旅行」題の一首（四二八九）がすこし注意される。寂蓮と定家の『新古今集』入集歌に詠まれ、後に『詠歌一体』が禁制詞とした「雪の夕暮」の句を、慈円が用いているのである。

過きつるかたにも猶やまよふへきこまに跡なき雪のゆふ暮

なお、慈円にはこの前後にも、

やともなし今朝わひしらにこえきつるあらちの山の雪のゆふ暮（日吉百首、文治四年以前）

みわの山いつくにこよひやとらまししるしをうつむ雪のゆふ暮（一日百首、建久元年四月）

の作例が有る。

『拾玉集』には他に、「大納言しのびて会せらるとききて、人にかはりて」と詞書する三題の作（五三六九から七二）が有る。この「大納言」が、文治五年七月十日に権大納言に任じられてから同年十二月三十日に左大将を兼ねるまでの期間、「殿の大納言」「大納言殿」等と『拾玉集』で呼ばれている良経であるとすると、歌題が水月・嵐・野露であることから、年時は文治五年秋となる。すなわち「雪十首会」に先立つ良経主催の会ということになる

が、他に資料が無いので断定は控えたい。

この年の歌会の作と見られるもう一例は、「北野会三首、静賢法印にかはりて」と詞書する社頭冬月・古池寒蘆・聞詞増恋の三題の作（四四七三から七五）である。推定理由として『拾玉集』贈答歌群中の慈円と寂蓮との贈答一対（五四六八・六九）を挙げる。

寂蓮入道昔おもふいけにはゐ井もくちはてゝ枯野につゝくあしのうら風と古池寒蘆によみたりしとかたりし朝に雪ふりしかはよみてつかはす

昨日ききし枯野のかせを身にしめてけふの心は雪にむもれぬ

返し　寂蓮

あはれしるこゝろを雪にむすはすはかれのゝ末に色を見ましや

（『校本拾玉集』）

詞書によれば、この贈答の前日、寂蓮が「古池寒蘆」の題による一首、

昔思ふ池にはいひも朽ち果てて枯野に続く蘆のうら風

を慈円に示して自讃したことが知られる（寂蓮のこの一首は、『玄玉和歌集』にも「古池寒蘆と云心をよめる」の詞書で収められている）。結題が一致する所から、寂蓮のこの作は、慈円が静賢の名で詠んだ「北野会」の三首と同じ機会に詠まれたものと考えられ、その年時は、贈答歌の配列から見て文治五年冬の十一月頃以降となる。

静賢は藤原通憲の子で、後白河法皇に信任される一方、兼実とも交渉が有り、慈円とは『拾玉集』所収の贈答歌（五五〇五から〇八、五五七二・七三、五六六一・六二など）が示すように親しい間柄に在った。『千載集』に六

首を採られた他、歌人としての経歴も有る。[12] 慈円が静賢の名で出詠した経緯、「北野会」の性格などは明らかでないが、『寂蓮集』[13]には別に「北野会、公景勧進」と詞書する二首（残菊・時雨）が有り、同じ大江公景（『千載集』に二首入集。）が再度「北野会」を催したことも考えられる。いずれにしても、九条家以外の歌会に慈円が出詠した例と見られる。

三、贈答歌

文治五年の贈答歌は、先述のように『拾玉集』第四冊から第五冊にかけて、七月以降のものが詠作時順に整理された形で残されている。十一月十八日の箇所に、静賢の美談として慈円が記し留めたと思われる静賢・尊円・実命のやりとり（五四六一から六五）が挿入されている以外は、慈円と他との贈答歌が続いている。その中では、西行との贈答（五四二二・二三）や西行の宮河歌合に関する定家との贈答（五四六六・六七）、任子入内に関する兼実との贈答（五四五二・五三）なども注意されるが、これらについては先学の言及も有るので、[14] ここでは量的にも特に目立つ寂蓮との贈答について整理しておきたい。

まずこの年の秋について見ると、慈円と寂蓮との贈答は三組有る。最初は、「文治五年七月、寂蓮入道のもとよりかはうちはつかはすとて」と詞書する一対（五四一八・一九）で、両首とも「かはうちわ」の語を詠みこんだ物名歌になっている。二組目は、「寂蓮入道、さがにすみ侍りけるころ、秋の風ことの外にて、堂のひはだもみな吹みだりて侍しとて」と詞書する寂蓮からの一首（五四二八）と、慈円から返された二首（五四二九・三〇）で、日時は明記せず、『寂蓮集』の詞書には「九月ばかり」と有るが、『玉葉』に見える八月二十日夜の暴風の後のもの

と推定される。三組目は「文治五年九月、寂蓮入道の許へ無動寺よりつかはすなり」の詞書による十首ずつの贈答（五四三一から五〇）で、『寂蓮集』の詞書から登山の途次の感興を詠んだものと知られる。これには、先述のように「旧跡御修造を思ふなるべし」と左注が有る。これはおそらく慈円の自注で、「…なるべし」という言い方は、建暦年間の日吉社奉納百首の跋文に「其道理を歌によまむと思なるべし」と有るのと同様、婉曲な表現として用いられたにすぎないと思われる。左注のあとの「先度吹過にける風の返し」と詞書する一首（五四五一）は、先の暴風の後に慈円から贈られていた、

　みな人は秋の心になりにけり吹過にける風のけしきに（五四三〇）

への寂蓮の返歌である。暴風後の贈答と、十首贈答とは『寂蓮集』にも収められているが、右の「吹過にける風」の一首と寂蓮の返歌とは漏れている。

なお、良経が右の十首贈答に興味を持ち、慈円に請うてその詠草を見たあと自らそれらに和する十首を詠んだのも文治五年内の事で、その作は『拾玉集』に収められている（五九九一から九九）。[15]

冬に入って寂蓮と慈円の間で交わされた贈答は二組有る。一組は十一月十七日の雪の翌朝の一対（五四五九・六〇）で、雪に託して同十二日の除目で定家が少将になったことへの祝意を述べた寂蓮の歌に、慈円が「天に口なし、和歌をもていふべし。いはふこころと思てかくいへるなるべし。やさしくこそ。」と左注を付している。『寂蓮集』にはこの贈答を収めないが、同日の定家と寂蓮との贈答が見え、寂蓮は任少将の祝いと四位昇進の期待とを詠んでいる。『拾玉集』の慈円と定家との贈答（五四五七・五八）と合わせて、この日、三人の間でそれぞれ歌が交わされたことが知られる。

この冬のもう一組は、先に引用した「古池寒蘆」の歌をめぐる一対（五四六八・六九）で、慈円・寂蓮の間で歌のことが話題にされていた具体的な例である。この贈答も『寂蓮集』には収めない。

文治五年の贈答は以上の五組で、定家との二組、西行・俊成・公衡・兼実・良経との各一組を大きく上廻り、慈円と寂蓮の交渉の親密さは明らかだろう。

なお、これ以前の時期における寂蓮と慈円との交渉について触れておくと、まず二人の直接の贈答で文治五年七月以前のものは、『拾玉集』『寂蓮集』等に見えない。『寂蓮集』には『拾玉集』と共通する贈答歌の他に、慈円の報恩講での作を収めているが、これらも、文治五年の贈答の詞書では「殿法印」である慈円の呼称が「座主」となっていることなどから建久三年以降のものと判断される。文治五年以前の慈円と寂蓮の接触として明確に知られるものは、先述の文治三年十一月の「結題百首」をふたりが共に詠んでいること（『拾玉集』）、文治四年四月はじめに、故良通と良経の詠草を慈円が俊成の許に送った際、寂蓮が仲介していること（『為秀本長秋詠草』）、の二例であるが、他に『拾玉集』所収の次の贈答（五九八七から九〇）が注意される。『校本拾玉集』によって示す。

待従定家許より定長入道か物語をきゝて

たつそまや月の雲ゐにやとしむる心をみかくみねの秋風

返しに

ひらの山月の雲ゐにやとはあれとこころは谷のいはかけにのみ

山にて詠したりし歌を副遣

返し　　定家

み山木はあらしの声を時雨にてのこれる月や色まさるらむ

みねの月たにのいはともまたわかすたた世をいとふみちをのみこそ

定家の官位表記が「侍従」であることから、文治五年十一月十三日の定家任少将以前の定家・慈円・寂蓮の三者の交渉を示すことが知られる。山上での慈円のようすを寂蓮（定長入道）から聞いた定家が、慈円の許に歌を贈り、慈円が返歌に山上で詠んだ作を添えて返信したのに対して、定家が再び二首を返している。歌の内容から見て季節は秋で、文治五年九月、寂蓮と山上の慈円とが十首の詠を交わした後、定家がそのことを寂蓮から聞いてのやりとりと見ても説明はつく。ただし、定家が侍従となった安元元年（一一七五）十二月以降で、秋に慈円が山上に居た年は、『玉葉』によって確認し得るもので安元二年、寿永三年、文治元年（九月二十五日以降）が有り、年時の断定はできない。

治承二年（一一七八）六月、兼実は故清輔に代わる歌道の師として俊成を招き、治承三年十月十八日の兼実家歌合には俊成が判者を勤め、寂蓮が作者に加っている。慈円と俊成や寂蓮との接触の機会はこの頃から有り得たが、俊成については、元暦元年（一一八四）十二月二十八日の『玉葉』に、慈円が歌合の判を俊成に請うた記事の有ることが知られている。寂蓮や、文治二年（一一八六）以後九条家の近臣になったとされている定家については、これ程早い接触の明証は無い。けれども『拾玉集』の贈答歌資料から見ると、慈円が俊成との間に多くの贈答歌を交わすようになるのは建久三年（一一九二）に慈円の「住吉社百首」に俊成が合点をした頃からであり、文治五年の頃には、むしろ寂蓮や定家の方が慈円と親密な交渉を持っている。

慈円と寂蓮とが頻繁に歌をやりとりし、定家もこのふたりと歌の交渉を持ち、良経が彼等の動きに関心を持って

、いるというのが文治五年の状況であり、すでに藤平春男氏や久保田淳氏の指摘が有るように、[16]良経はこうした慈円の動きに影響されながら建久期歌壇の形成に向っていったのである。

注

(1) 松野陽一氏『藤原俊成の研究』（笠間書院、昭和四十八年）、七二九頁。
(2) 前掲書、七三二頁。
(3) 『慈円全集』所収。
(4) 多賀宗隼氏『慈円の研究』（吉川弘文館、昭和五十五年）、九一頁。
(5) 久保田淳氏『新古今歌人の研究』（東大出版、昭和四十八年）、五五八頁以下。
(6) 片山享氏『校本秋篠月清集とその研究』（笠間書院、昭和五十一年）、六五一頁。
(7) 松野氏、前掲書、一九八頁以下。同、七三一頁。
(8) 同右、七三一頁。
(9) 藤平春男氏『新古今歌風の形成』（明治書院、昭和四四年）、四六頁以下。
(10) 片山氏、前掲書、六五八頁。
(11) 久保田氏、前掲書、五〇三頁。片山氏、前掲書、六五七頁以下。
(12) 井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、昭和五十三年）五二二頁。
(13) 半田公平氏『寂蓮法師全歌集とその研究』（笠間書院、昭和五十年）および『私家集大成・中世Ⅰ』所収。
(14) 松野陽一氏「西行の『諸社十二巻歌合』をめぐって」（平安朝文学研究、第二巻第八号、昭和四十四年十二月）、同氏、前掲書、七二八頁以下。片山氏、前掲書、六五六頁以下。多賀氏、前掲書、八一頁。
(15) 片山氏、前掲書、六五九頁。
(16) 藤平氏、前掲書、三三頁、四六頁。久保田氏、前掲書、五〇三頁。

（大学院学生）